

## 保育場面における幼児の主体性の捉え方

豊明幼稚園  
愛知教育大学幼児教育教室

坂田 憲治  
久世 妙子

### A Study of "SYUTAISEI" in Early Childhood Education

Toyoake Kindergarden Kennji SAKATA  
Department of Early Childhood Education Taeko KUZE

#### はじめに

平成2年4月1日より施行された幼稚園教育要領<sup>1)</sup>では、「幼稚園の基本」として「幼児の主体的な活動を促し、幼児にふさわしい生活が展開されるようにすること」が冒頭に述べられている。そして「これまでの教育においては、教師が望ましいと考える活動を幼児におこなわせようとする傾向が多くみられ、能力や態度などの獲得については、これまでは、どちらかというと大人に教えられたとおりに幼児が覚えていくという側面が強調されてきたが、最近では、幼児自身が自発的・能動的に環境とかかわりながら、生活の中で状況と関連付けて身につけていく側面の重要性が指摘されている」としている。確かに幼稚園において幼児が他の幼児とかかわり合いながら主体性を発揮して生活を営むことは、物事に取り組む意欲や態度を育てる上できわめて重要な意味をもっているといえる。このことは行為者が自分のおかれている周りの状況との関係(環境との関係)で「主体性」を発揮すること、主体的であることが問われることになる。

幼児が主体的であったり、主体性を発揮することは大切であるといえるが、具体的にどのような状況や環境でどのような姿をしめす幼児が主体性があるとするのか新しい幼稚園教育要領では明確になっていないように思える。あえていえば「自発的・能動的であること」といえるが、現場に携

わっている教師として、主体性のある子を育てようとする立場からすると、子どもが自発的であり、能動的であることだけで、「主体性」がある子であると捉えるには疑問が残る。

なぜならば環境と幼児のかかわりは、基本的には相互作用であるので、環境に自らの構えで自発的にかかわっていく場合と、環境に自らの構えを自発的に合わせようとする場合とが考えられるからである。

新井ら<sup>2)</sup>は、教育現場が実際には必ずしも幼児の意欲や主体性を配慮したものになっていない原因の一つが「幼児の主体性をどのように理解したらよいのか」「幼児の主体性は、どのように評価、測定できるのか」の解明が不十分であるからであると指摘している。

そこで本研究は、「主体性」の概念を明らかにし、保育現場における「主体性」の捉え方の現状を調査し、保育現場で随時子どもの主体性を把握できるチェックリストを作成しようと意図した。

#### 1. これまでの研究経過<sup>3)</sup>

##### (1) 主体性の概念について

これまで調べた限りでは、主体性をテーマとした先行研究は少ない。心理学分野において新井ら<sup>2)</sup>が「主体性の発達尺度の作成(1)」として発表しているのみであった。

そこでは主体性を「幼児を含めた人間が、自分の活動において自分の意欲や判断に基づいて活動

を開始したり, 方向づけたり, 調整したりしようとする性質」と定義されている。

また自主性の研究は以前から多くなされており, そこでは主体性は自主性の下位概念として捉えられている場合が多い。

齊藤ら<sup>4)</sup>は, 自主性を測定する尺度の下位概念の一つとして主体性を「自らの問題を課題としてとらえようとする積極的な構え」として定義している。

また石川ら<sup>5)</sup>も自主性の測定の下位概念のひとつとして主体性を「独立性と深い関係にあるが, 単に他者から影響されないということだけでなくみずからの問題を自分自身の課題として捉えようとする, 積極的な構え」としている。

平井<sup>6)</sup>は, 主体性は「自発性と独立性とよばれている能力と接近した関係にある」とし, 主体性とは, 自己との関係においては, 「自己の問題を自己の課題としてとらえる」ことであり, 他者との関係においては「他者に影響されずに行動することである」としている。

これらの研究はいずれも自主性を行動の側面から捉えようとしている。

それに対して自主性の研究では加藤<sup>7)</sup>は自主性を動機という側面から捉えることを強調し, 自主性とは, 「主体性よりは, 視野の狭いより本人の意図に基づいたものである」としている。

このように自主性を行動的構成概念として捉えるか, 動機的構成概念として捉えるかについて, 宮本<sup>8)</sup>は「動機的構成概念として自主性を捉える場合には, 自主性の動機の得点化が困難である。」ので, 実際の現場においては, 行動構成概念で捉えながら, その行動の動機にも目をむけるようにすることが現実的であると考えられると指摘している。

以上のような研究をもとに本研究では, 主体性を動機的概念を配慮に入れながら行動的概念として捉え, 「自分のまわりの環境との相互関係のなかで, 自らのあり方を感じとり, 判断し, 自らのこととして行動できる態度・能力」と定義した。

## (2) 保育現場での主体性の捉え方の調査

現場の保育者(27名)に「主体性のある子はど

んな子か」, また「主体性と自主性とはどんな点が違うのか」を自由記述で書いてもらい, 先行研究の結果を加味して, 主体性に関わると思われる項目を抽出した。その結果は次の通りである。

- ①主体性と自主性は何等かの違いがあると33%の保育者が答えていた。主体性は周り, 環境とに関わり, 特に友達と関わって行動する傾向であり, また自主性は個人的・独立的に行動する傾向であると捉えていることが分かった。
- ②主体性のある子どもの特徴を回答数の多い順にまとめると, 言語的自己表現, 自発性, 独立・自立性, 知的判断力, 創造性, 集中力, 自制, 責任感, 協調性であった。またこれらの特徴は, 「～ができる」という行動的特徴で捉えられている場合と, 「～しようとする」という動機的特徴で捉えられている場合とがあった。
- ③そこで主体性の構成領域を自発性, 自立性, 自制, 知的判断力, 創造性, 言語的自己表現の6つの領域とし, 45項目からなる調査項目を作成した。

## (3) 主体性に関わるチェックリスト作成のための調査

保育者の調査をもとに抽出された主体性に関わる45の調査項目をさらに精選するために, 保育者(84名)に各項目について, 主体性をあらわす重要度を7段階でチェックしてもらい, その結果により主体性のチェックリストを作成した。

1) 項目の精選は次の手順で行った。

- ①各領域間の質問項目数は, 保育者の実用性を考慮すると全項目数は30項目程度が妥当であろうと考えた。各領域の質問項目数はできるだけ同じ項目数にするほうが望ましい。しかし言語的自己表現領域は, 調査の結果で主体性を把握するうえで, 保育者が色々な言語表現を挙げていることから, この領域は他の領域より多い項目にする必要があらうと考えた。
- ②各領域で重要度の高い項目を選ぶ。したがって平均得点の低い項目から除外する。
- ③保育者間の意見の違いの小さい項目を選ぶ。したがって標準偏差値が高い項目は除外する。その結果, 自発性, 自立性, 自制, 知的判断力,

創造性の領域に関する質問項目は各4項目、言語的自己表現の領域に関する質問項目は8項目とし28項目5段階からなる主体性のチェックリストを作成した。

#### (4) チェックリストの妥当性の検討

主体性のチェックリストの項目の妥当性を検討し、チェックリストによる幼児の主体性の発達を調べることを目的に、平成4年10月～11月私立幼稚園5園に調査を依頼し、保育者（各学年14名、合計42名）に担当クラスの園児（1199名）を対象に全員チェックリストによる主体性の評定を7段階でチェックしてもらった。同時に担当園児全体を主体性の高い群、中位の群、低い群の3群に分け、相対的評価をしてもらい、全体評価の高い群と低い群別にチェックリストの各項目の得点との関連を調べた（ $X^2$ 検定）

その結果、各学年において、各項目は主体性の高い群と低い群では有意な差があり、すべての項目において主体性の高い群が高い得点であった。また各領域においても、主体性の高い群と低い群では有意な差があり、すべての領域において主体性の高い群が高い得点であった。

しかし3才児の平均値が4才児の平均値より高い項目がみうけられた。これはこのチェックリストの行動評定の基準が曖昧なためであると考えられた。したがってチェックリストの評定が主観的になるのを排除するため、具体的な場面での評定にすることが必要であると考えた。さらに各項目の各評定段階が具体的な場面で4段階に行動評定できるよう質問項目をしめたチェックリストを作成した。

## 2. チェックリストの保育現場への適用

これまでの研究成果をさらに発展させるために平成5年度は、チェックリストの現場への適用を探るため、次の研究を行った。

#### (1) 研究目的

平成4年度作成のチェックリストを用いて、5月と10月の2回の調査を行い、次のことを明らかに

にすることを目的とした。

- ① 学年別項目得点からみた主体性の発達
- ② 5月と10月の主体性の変化
- ③ 因子分析による主体性構成因子の抽出
- ④ 因子群別得点傾向の分析

#### (2) 調査時期

- 第1期 平成5年5月6日～11日  
第2期 平成5年10月5日～9日

#### (3) 調査対象

- 豊明市内T幼稚園  
調査対象の人数は表1の通りである

表1 調査対象人数

組別	3才児			4才児			5才児			計
	26	28	24	31	32	31	39	38	38	
男	50			42			64			156
女	28			52			51			131
計	78			94			115			287

(人)

#### (4) 調査方法

5月・10月の調査実施前に全体及び各学年で、調査項目の評定の話し合いをした後、各担任に担当しているクラス全員を対象に「主体性チェックリスト」による調査を実施した。

#### (5) 調査内容

調査用紙は28項目の行動特徴からなり、各項目とも具体的な行動傾向を1点から4点に得点化し、なお1点から4点の配置及び具体的な行動傾向は、T幼稚園の主任と話し合い、具体的に発達段階にそったものとした。

#### (6) 結果と考察

##### 1) 学年別変化

##### A, 各項目の全体的傾向

各項目の平均値は表2のとおりである。

5月では、28項目すべて上位の学年が高い得点であり、標準偏差値も学年があがるに従って高くなり、個人差も広がる傾向にあった。

3才児の平均値は1点から2.12点の間にあり、学年平均は1.63点であった。4才児の平均値は1.63点から2.62点の間にあり、学年平均は2.21点であった。5才児の平均値は2.42点から3.17点の間にあり、学年平均は2.76点であった。

10月では、項目23を除く27項目で上位の学年が高い得点であり、標準偏差値も学年があがるに従って高くなる傾向にあった。

3才児の平均値は1.05点から2.62点の間にあり、学年平均は1.92点であった。4才児の平均値は2.00点から3.16点の間にあり、学年平均は2.60点であった。5才児の平均値は2.57点から3.18点の間にあり、学年平均は2.83点であった。

全項目の学年平均得点では、5月では3才児と4才児の得点差と4才児と5才児の得点差は同じであるが、10月では3才児と4才児の得点差が

表2 主体性チェックリストの平均値

- 5月 -

- 10月 -

項 目	3才児		4才児		5才児		3才児		4才児		5才児	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D
(1)友達を誘って遊ぶ	1.63	0.80	2.13	0.83	2.69	0.82	2.07	0.78	2.50	0.58	2.72	0.89
(2)自分から遊びに入っている	2.12	0.86	2.55	0.69	2.99	0.69	2.46	0.69	2.85	0.55	3.07	0.69
(3)課題に対して、興味を持って取り組む	2.01	0.79	2.38	0.76	3.07	0.83	2.10	0.81	2.83	0.78	2.92	0.79
(4)自分から遊びをみつけられる	2.01	0.90	2.42	0.82	3.00	0.72	2.62	0.68	2.80	0.52	3.04	0.60
(5)自分のことは自分で解決しようとする	1.81	0.60	2.54	0.65	2.84	0.79	2.15	0.62	2.90	0.69	2.94	0.85
(6)困ったことを自分で解決しようとする	1.39	0.51	1.85	0.50	2.42	0.76	1.50	0.50	2.38	0.60	2.57	0.79
(7)課せられた仕事を、最後までやり通せる	1.89	0.60	2.29	0.71	2.79	0.81	1.92	0.59	2.60	0.80	2.76	0.83
(8)保育者が手を貸そうとすると「自分でやる」と言う	1.95	0.64	2.45	0.68	2.76	0.63	2.21	0.63	2.70	0.54	2.82	0.60
(9)貸し借りをして遊べる	1.53	0.55	2.12	0.43	3.16	0.73	1.95	0.62	2.64	0.63	3.17	0.77
(10)保育者に話しかけたい時、他の子が話しをしている間、待ってられる	1.50	0.50	2.18	0.65	2.64	0.88	1.76	0.60	2.39	0.61	2.81	0.87
(11)手洗い等の順番が待てる	1.67	0.57	2.10	0.62	2.86	0.54	2.15	0.64	2.59	0.55	3.09	0.50
(12)保育者の話を最後まで聞ける	2.04	0.74	2.36	0.78	2.88	0.95	2.14	0.71	2.56	0.68	2.77	1.01
(13)してはいけないことが分かるとやめられる	1.96	0.65	2.19	0.53	2.94	0.85	2.04	0.34	2.56	0.58	2.87	0.82
(14)園のきまりをいちいち言われなくてもやめられる	1.82	0.38	2.28	0.49	3.17	0.78	1.96	0.34	2.57	0.56	2.91	0.80
(15)まわりの状況を判断してから行動できる	1.69	0.69	2.09	0.66	2.67	0.67	1.96	0.57	2.59	0.51	2.64	0.84
(16)遊びの役割やルールを友達と申し合わせて遊べる	1.08	0.27	1.63	0.74	3.02	0.71	1.36	0.48	2.78	0.81	3.07	0.81
(17)遊びをより楽しめるような、色々な発想を提案できる	1.28	0.50	2.09	0.63	2.50	0.77	1.59	0.57	2.21	0.52	2.70	0.81
(18)みたてで遊べる	1.35	0.48	1.94	0.70	2.66	0.75	1.81	0.43	2.25	0.52	2.77	0.77
(19)ごっこ遊びで役になりきって遊べる	1.69	0.76	2.23	0.83	2.94	0.73	2.42	0.79	2.60	0.78	2.83	0.91
(20)工夫して作れる	1.03	0.11	1.90	0.65	2.65	0.91	1.05	0.22	2.00	0.46	2.66	0.83
(21)してほしいこと、ほしいものをはっきり大人に頼める	1.78	0.75	2.32	0.75	2.70	0.70	2.04	0.67	2.81	0.76	2.82	0.68
(22)製作に必要な材料がない時、保育者に頼める	1.00	0.00	2.33	0.76	2.64	0.70	1.05	0.32	2.44	0.61	2.57	0.75
(23)いやなことは「いや」と言える	1.82	0.83	2.25	0.71	2.44	0.66	2.01	0.81	2.67	0.53	2.59	0.71
(24)自分が困った時、上手に保育者に助言を求める	1.54	0.69	2.06	0.68	2.56	0.76	1.89	0.68	2.39	0.55	2.57	0.71
(25)入りたい遊びに自分から「入れて」と言える	1.99	0.88	2.62	0.95	3.16	0.83	2.50	0.97	3.16	0.96	3.18	0.87
(26)他の子の行動をみて、「やってみようかな」と言う	1.58	0.69	2.32	0.64	2.56	0.79	1.96	0.69	2.70	0.46	2.61	0.82
(27)自分の考え、思いを相手にことばで言える	1.13	0.40	2.21	0.76	2.85	0.92	1.47	0.61	2.82	0.71	2.93	1.00
(28)他の子に励ましのことばがかけられる	1.13	0.40	2.01	0.78	2.44	0.86	1.68	0.82	2.38	0.65	2.82	0.82
全 体	1.63	0.59	2.21	0.69	2.79	0.77	1.92	0.61	2.60	0.63	2.83	0.79

4才児と5才児の得点差よりも大きい。

B、各項目の学年差の傾向

各項目の学年間で平均値の差の検定をした結果は表3の通りである。

表3 学年間の平均値の検定

項目	5月			10月		
	3・4才	4・5才	3・5才	3・4才	4・5才	3・5才
1	<<	<<	<<	<<		<<
2	<<	<<	<<	<<		<<
3	<	<<	<<	<<		<<
4	<	<<	<<			<<
5	<<	<<	<<	<<		<<
6	<<	<<	<<	<<		<<
7	<<	<<	<<	<<		<<
8	<<	<<	<<	<<		<<
9	<<	<<	<<	<<	<<	<<
10	<<	<	<<	<<	<<	<<
11	<<	<<	<<	<<	<<	<<
12	<	<<	<<	<		<<
13		<<	<<	<<	<<	<<
14	<<	<<	<<	<<	<<	<<
15	<<	<<	<<	<<		<<
16	<<	<<	<<	<<		<<
17	<<	<<	<<	<<	<<	<<
18	<<	<<	<<	<<	<<	<<
19	<<	<<	<<	<<		<<
20	<<	<<	<<	<<	<<	<<
21	<<	<<	<<	<<		<<
22	<<	<<	<<	<<		<<
23	<<	<<	<<	<<		<<
24	<<	<<	<<	<<		<<
25	<<	<<	<<	<<		<<
26	<<	<<	<<	<<		<<
27	<<	<<	<<	<<		<<
28	<<	<<	<<	<<	<<	<<

< : p<0.05, << : p<0.01

5月では、3・4才児、4・5才児ではほとんどの項目で有為な差がみられた。3・4才児で有為な差がみられなかった項目13（してはいけないことがわかると、やめられる）は、入園してまだ1ヶ月程しかたっていないので、消極的な子どもに対する評定の難しさがうかがわれる。

10月では、3・4才児ではほとんどの項目で有為な差がみられるが、項目4・19の遊び場面の評定では有為な差がみられなかった。4・5才児では、28項目の中で有為な差がみられた項目は9項目であった。これらの項目で、項目（9、10、

11、13、14）は園での基本的ルールにそって行動する傾向を評定する項目であるが、項目（17、18）は遊びの発想や工夫性評定する項目であるといえる。

3・4才児でも4・5才児でもどちらの学年間でも有為な差がみられない項目は、項目（4、19）の2項目であった。このことは、遊び場面での評定の難しさを示しているといえる。

2) 5月と10月の変化

5月と10月の平均値の変化は図1の通りである。各項目の5月と10月の平均値は、3・4才児では全項目で10月が5月よりも得点が高くなっている。しかし5才児では、5月よりも10月の得点が低い項目（3・7・12・13・14・15・19・22）がある。このうち項目14（園でのきまりをいちいち言われなくても守れる）は、平均値の検定で有意な差がある。これは進級して約1ヶ月しか経過し

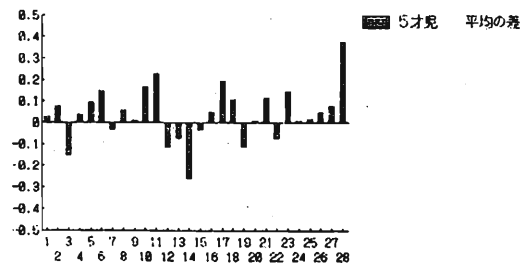
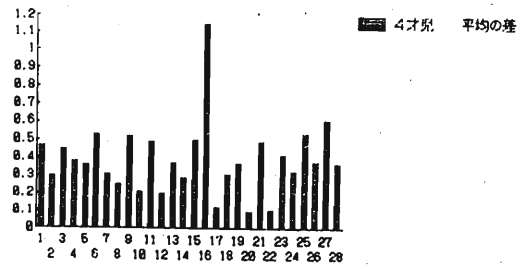
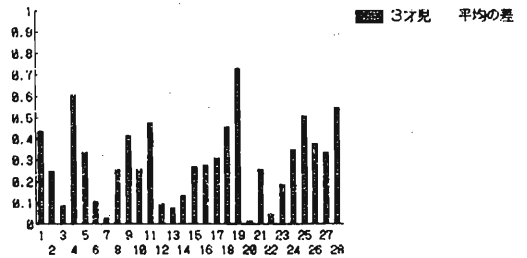


図1 5月と10月の平均値の差

ていないので、子どもたちに、年長になった自覚やある意味の気負いがあり、5月では高い得点になったものと思われる。したがって5月の5才では項目14が一番高い平均値になっている。

5才児の5月の平均値が10月よりも0.1以上高い項目のうち項目3(課題に対して興味を持って取り組む)、12(保育者の話しを終わりまで聞ける)も同様の理由のように考えられる。また項目19(ごっこ遊びで役になりきって遊べる)も0.1以上の差があるが、5才児は10月頃になると“おうちごっこ”等ではなりきって遊ぶというよりも少しづつ話し合いをし、その都度役割を調整しながら遊びを進めていくようになる一方、鬼ごっこ

等はゲーム性があるので、役になりきって遊ぶ姿が見受けられるようになる。したがってこの項目19は、“ごっこ”の内容とその“役”の検討が今後必要になってくる。

### 3) 因子分析による主体性構成因子の抽出

28項目について因子分析を行った。因子得点0.5以上の項目を取り出すと、表5の通りである。なお累積寄与率は5月が64.7%で10月が62.3%である。

5月時点での第一因子は、周りの環境に自分を合わせていく傾向の項目が多く、自律因子といえる。第二因子は、遊びを通して自ら周りの環境に働きかけていく傾向の項目であり、自発因子一遊

表5 項目因子分析(バリマックス法)

第一因子(自律因子) 寄与率23.17%(5月)		第一因子(自律因子) 寄与率19.72%(10月)	
項目	因子得点	項目	因子得点
(9) 笑し顔りをして遊ぶ	0.738	(9) 笑し顔りをして遊ぶ	0.680
(10) 保育者に話しかけた時、他の子が話している間、待つていらる	0.694	(10) 保育者に話しかけた時、他の子が話している間、待つていらる	0.687
(11) 手紙い等の圖書が解てる	0.686	(11) 手紙い等の圖書が解てる	0.582
(12) 保育者の話しを最後まで聞ける	0.599	(12) 保育者の話しを最後まで聞ける	0.743
(13) してはいけなことが分かるやめられる	0.773	(13) してはいけなことが分かるやめられる	0.807
(14) 園のままりをいらいら言わなくてもやめられる	0.786	(14) 園のままりをいらいら言わなくてもやめられる	0.816
(15) まわりの状況を見解してから行動できる	0.686	(15) まわりの状況を見解してから行動できる	0.691
(16) 遊びの役割やルールを友達と申し合わせて遊ぶ	0.700	(16) 遊びの役割やルールを友達と申し合わせて遊ぶ	(0.472)
第二因子(自発因子一遊び一) 寄与率17.89%		第二因子(自発因子一遊び一) 寄与率14.63%	
(1) 友達を誘って遊ぶ	0.730	(1) 友達を誘って遊ぶ	0.668
(2) 自分から遊びに入っていく	0.827	(2) 自分から遊びに入っていく	0.806
(4) 自分から遊びをみつげられる	0.816	(4) 自分から遊びをみつげられる	0.777
(17) 遊びをより楽しめるような、色々な見解を提案できる	0.524	(17) 遊びをより楽しめるような、色々な見解を提案できる	0.572
(18) あたてて遊ぶ	0.584	(18) あたてて遊ぶ	0.553
(19) ごっこ遊びで役になりきって遊ぶ	0.613	(19) ごっこ遊びで役になりきって遊ぶ	0.548
第三因子(自立因子) 寄与率15.12%		第三因子(工夫因子) 寄与率10.63%	
(6) 困ったことを自分で解決しようとする	0.548	(18) あたてて遊ぶ	0.557
(21) してほしいこと、ほしいものを出さ大人に頼める	0.658	(20) 工夫して作る	0.768
(22) 製作に必要な材料がない時、保育者に頼める	0.643	(22) 製作に必要な材料がない時、保育者に頼める	0.640
(23) いやなことは「いや」と言える	0.543	第四因子(自立因子) -ことば- 寄与率9.08%	
(24) 自分が困った時、上手に保育者に助けを求め	0.677	(21) してほしいこと、ほしいものを出さ大人に頼める	0.575
(27) 自分の考え、意見を相手にことばで言える	0.551	(23) いやなことは「いや」と言える	0.704
第四因子(独立因子) 寄与率8.67%		(24) 自分が困った時、上手に保育者に助けを求め	0.551
(3) 課題に対して、興味を持って取り組む	0.548	(6) 困ったことを自分で解決しようとする	(0.487)
(5) 自分のことは自分で解決しようとする	0.522	第五因子(独立因子) 寄与率8.23%	
(7) 誰せられた仕事を、最後までやり通せる	0.580	(3) 課題に対して、興味を持って取り組む	0.606
(8) 保育者が手を貸そうとすると「自分でやる」と言う	0.514	(5) 自分のことは自分で解決しようとする	0.558
		(7) 誰せられた仕事を、最後までやり通せる	0.637
		(8) 保育者が手を貸そうとすると「自分でやる」と言う	(0.460)
		(7) 誰せられた仕事を、最後までやり通せる	0.637
		(8) 保育者が手を貸そうとすると「自分でやる」と言う	(0.460)

び一といえる。第三因子は、いろいろな状況で自立的に対応する行動傾向の項目が多く、自立の因子といえる。第四因子は、個人の独自性を示す項目であり、独立因子といえる。

10月時点では第一因子・第二因子の項目は5月と全く同じであった。第三因子は、工夫を示す項目が集まっており、工夫の因子といえる。第四因子は、5月とほぼ同じ項目が集まっており、自立因子といえるが「ことば」が中心的役割をはたしている。第五因子は、5月の第四因子と全く同じ項目が集まっており、独立因子といえる。

したがって5月と11月の基本的な項目の集まりは同じであると考えられる。また10月になると遊びや製作での工夫の因子が伸びてくる。

次には、この因子群により項目を分類し、主体性の変化を考察した。

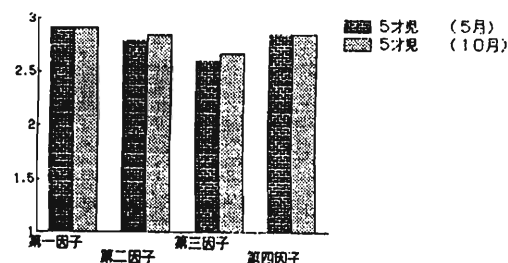
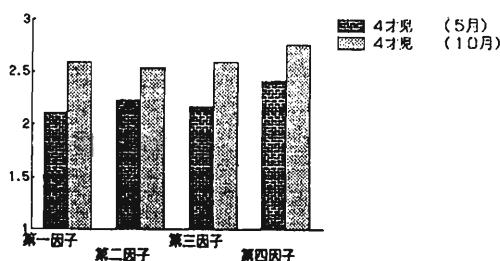
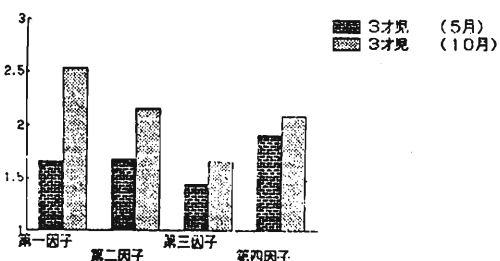


図2 各因子群の5月と10月の平均得点

#### 4) 因子群別得点傾向の分析

5月と10月の各因子群別得点平均は図2の通りである。

各因子群の平均値は、学年があがるにしたがって高い得点になっている。3才児と4才児ではすべての因子群の平均値は5月より10月が高い得点になっているが、5才児ではすべての因子群で5月と10月の得点の差が小さくなっている。

5月と10月の各因子別H・M・L群の得点の変化を知るために平均値の検定を行った結果は表4の通りである。

各因子の3群とも、5月と10月では、3才児と4才児では有為な差がみられるが、5才児では第一因子、第二因子、第四因子のM群においてのみ有為な差がある。平均値はどの因子も10月が5月より高い得点である。

表4 H・M・L群の5月・10月の変化

	第一因子			第二因子			第三因子			第四因子		
	H	M	L	H	M	L	H	M	L	H	M	L
3才児	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<
4才児	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<	<<
5才児		<<						<			<<	

< : p<0.05 < : p<<0.01

以上のことから、10月時点ではこの主体性チェックリストの4因子においては、3才児及び4才児には発達の評定も兼ね備えていることがいえる。しかし5才児ではこの5月から10月までの変化や10月時点の結果からは、項目得点の4点以上の評定の高い得点における行動特徴の上位の程度をもう少し高くする必要があるのであるように思える。

また項目の高い得点を示す2つの評定値間(3点、4点)基準の開きが大きいかとも考えられる。これらの点は、来年以降の課題である。

#### 5) まとめ

幼児教育の現場で随時実施できる主体性のチェックリストの作成を目指して本研究では、質問項目の内容を具体的な場面での行動傾向でチェックできるように工夫したチェックリストを作成し5月と10月に調査した。

その結果次のことが分かった。

- 1) ごっこ遊びの質問項目では, ごっこ遊びは種類も多くまたそれぞれのごっこ遊びにおける幼児のかかわり方が違うと考えられるので, ごっこ遊びの種類を少し限定する必要があることが分かった。
- 2) 5月と10月時点で, 28項目を因子分析することにより, 両期間で変化しない基本的な因子と発達・分化する因子があることが分かった。基本的な因子としては, 自分の周りの環境に自分を合わせていく自律的な因子と, 周りの環境に遊びを通してかかわり, 自分に取り込む自発的な因子が主要な因子であった。またそれに続く因子として状況に対して自分なりの対処をしていく自立的因子, 周りの状況に独立的, 独自の挑んでいく独立的因子があることが分かった。工夫の因子は5月時点では見受けられなかったが, 10月時点では単独の因子として抽出された。この因子は発達・分化する側面をもっていると考えられる。
- 3) 因子分析から得られた4因子群による分析では, 3才児と4才の有効性は示されたといえる。しかし質問項目の上位の評定値が低いか, 上位の評定値の発達の開きが大きいために5才児では問題があった。このチェックリストの評定値作成時には, 得点1を入園当初の3才児の低位群, 得点4を卒園前の高位群の行動特徴にした。この基準については, さらに検討課題としたい。  
(1993年11月30日受理)

### 引用文献

- 1) 文部省 幼稚園教育指導書増補版 フレーベル館 1990 p82
- 2) 新井邦二郎他 幼児の主体性の発達尺度の作成 日本保育学会第45回大会研究論文集 1992 p56-p57
- 3) 坂田憲治 幼児の主体性に関する一考察(幼児教育における主体性の捉え方) 修士論文 1993.3
- 4) 齊藤美知子他 幼児の遊びと自主性の発達についての実験的研究(第一報) 日本教育心理学会第27回発表論文集 1985 p304-p305

- 5) 石川勤, 藤原喜悦 自主性診断検査解説 金子書房 1988
- 6) 平井信義 意欲(自主性)と思いやり(情緒)の構造とその発達(試論) 大妻女子大学家政部紀要第18号 1982 p106
- 7) 加藤千佐子 自主性に関する測定法 作新学院女子短期大学紀要5 p180
- 8) 宮本美沙子他 自主性に関する概念の検討 日本女子大学児童研究紀要第4号 1979 p39-p44

### 参考文献

- 1) 齊藤美知子他 幼児の遊びと自主性の発達についての実験的研究(第二報) 日本教育心理学会第28回発表論文集 1986
- 2) 齊藤美知子他 幼児の遊びと自主性の発達についての実験的研究(第三報) 日本教育心理学会第30回発表論文集 1988
- 3) 千羽喜代子他 幼児の集団生活における個人差の検討(第1-3報) 日本保育学会第32-34回大会研究論文集 1979-81
- 4) 平井信義 自主性・創造性の構造とその発達について 日本保育学会第35回大会研究論文集 1982